

雄物川、主導権握れず 日本航空(山梨)に苦杯

春高バレー

バレーボールの第74回全日本高校選手権大会(春高バレー)第4日は8日、男女の準決勝を行い、男子の雄物川は日本航空(山梨)に0-3で敗れ、初の決勝進出を逃した。昨夏の全国高校総体覇者の鍋田(熊本)が日南学園(宮崎)に3-0で快勝。女子は通潮を聖光学院(岡山)が金蘭会(大阪)に3-0で勝利。市川学園(富山)は総体優勝の下北沢成徳(東京)を3-1で下して決勝に進んだ。

▽男子準決勝

日本航空
(山梨) 3
25 25 25
19 14 19
0 雄物川

雄物川は日本航空の多彩な攻めに対応できなかった。第1セットは石塚を中心にオープン攻撃から強烈なスパイクを決め、中盤までは戦いを展開。しかし15-14から相手エースに3連続得点を奪われ、コンビバレーに翻弄された。

第2セット以降はクイックや時間差攻撃、石塚と角田のバックアタックで対抗したが、相手のテンボの鋭い攻撃を崩すことができず、最後まで主導権を握ることはできなかった。

▽男子準決勝

鍋田 西 3
25 25 25
21 23 21
0 日南学園
(熊本)

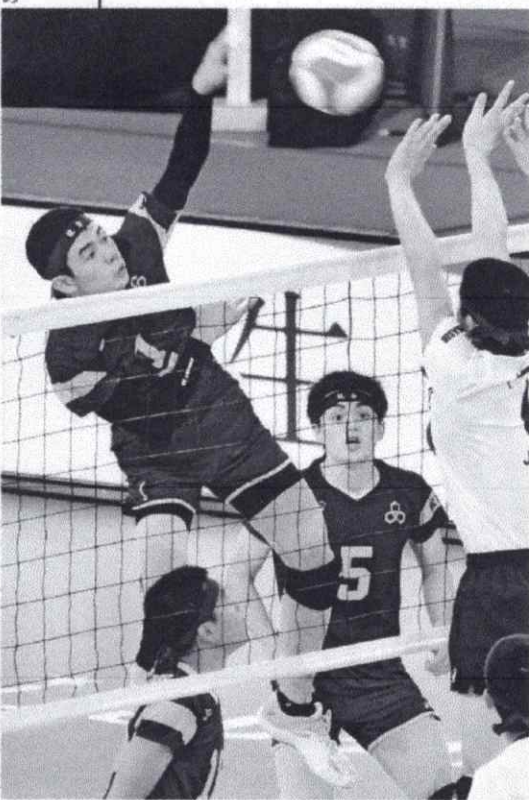
焦点

4強入りを決めた前日のうれし涙から、昨、決勝進出を逃して悔し涙になった。雄物川のエース石塚選手は、3年と角田選手は、2年と、同のサイド攻撃は相手の正確なレシーフに封じられ、多彩な速攻にも苦戦。ストレート負けを喫したが、石塚は「逃げずにスパイクを打ち続けた。エースとしての責任は絶対誰にも負けなかった」と集大成

持ち味貫き充実感も

の舞台を飾り返った。序盤から石塚が躍動した。夏の全国総体以降、チームで取り組んでいた磨きトレーニングを強化。ジャネット、長い腕を生かし、強打と相手を開いた。宇佐美大輔監督は「大会初戦は一番難しかったが、センターコートで最後まで彼らに勝てた。大きく成長した」と目を細めた。

角田はサブプレシアがうまくいかず、気持ちのいいスパイクを決められなかったという。それでも石塚と支え合ってきた3年間の振り返り「3位はうれしかったし充実感も溢れた。日本航空とは3年前に戦った。2-1で勝利した。宇佐美監督の春高初勝利となった試合だった。今年は学校があることを知ってほしい。ベスト4以上に食い込めるように自分もまた頑張りたい。さらに上を目指した挑戦が始まっている。」(加藤慶一郎)



【男子準決勝】日本航空(山梨)と雄物川。第3セット、スパイクを放つ雄物川の石塚(左)

「来年、必ず戻る」

雄物川の4人の3年生を支えたのは1、2年生の活躍だった。「必ず来年また戻ってくる」。今大会の快進撃に役立った選手たちは涙を拭き、前を見据えた。

今大会はリベロ佐々木翼(2年)とアウトサイドヒッター滝澤大希(同)らを中心に1、2年生が手堅く守備を固め、石塚選手(3年)、角田選手(同)の両エースが良好な形でスパイクを打てる流れをつくった。ミドルブロッカー高橋一太(1年)もブロックと速攻で貢献し、攻守ともに安定した戦いぶりを見せた。

だが準決勝はこれまでとは様子

1、2年生攻守で貢献

が違った。初めてセンターコートに立ち、これまでにないプレッシャーや緊張を感じたという。「力が入りすぎてしまった」(滝澤)。「昨日までできたことができなかった」(高橋一)一。最後まで本来の調子を取り戻すことができなかった。準決勝の厚い壁はまたしても打ち破ることはできなかった。試合後、3年生は目を真っ赤にしながら後輩に「本当にありがとう」と感謝の言葉を掛けた。佐々木は「先輩たちのおかげで最高の経験ができた。次は自分たちの番」と語り、再びセンターコートに戻ることを誓った。宇佐美大輔監督は「何が足りなかったかを考え、悔しさをぶつけてほしい」とより一層の奮起を促した。

(加藤慶一郎)



第1セット、速攻を決める雄物川の高橋一